

Japonês

Revisão: Prof^a. Meiko Shimon

Kenji Miyazawa (1896 – 1933)

Nasceu como filho do próspero comerciante na cidade de Hanamaki, ao noroeste do Japão. Conhecido como um devoto budista e ativista social excêntrico, formou-se na Escola Superior Agrícola e Florestal de Morioka. Desde cedo, Miyazawa demonstrou sua indignação relativa a existência de diferença social. Um prolífico escritor de histórias infantis, escreveu muitas obras dos quais parecem ser superficialmente humorístico, incluem mensagens destinadas à educação e a sua insatisfação perante a desigualdade social.

Sua obra caracteriza-se pela utilização de onomatopéias e da descrição de jogo de luzes através das expressões miméticas, muitas delas peculiares à língua japonesa, o que enriquece o seu conteúdo fornecendo informações que insitam a sensibilidade auditiva e visual do leitor de forma mais direta.

Entre as obras mais conhecidas têm “O restaurante muitos pedidos”, “Matasaburo, o menino dos ventos”, “A noite da ferrovia Via-Láctea” e coletânea de poemas “A primavera e Ashura”.

Soseki Natsume (1867-1916)

Romancista, ensaísta, poeta, calígrafo e pintor. É um dos nomes mais marcantes na Literatura Moderna Japonesa. Nasceu e viveu em Tóquio, formou-se na Universidade Imperial de Tóquio, onde, mais tarde, tornou-se professor de Literatura Inglesa. Em seu primeiro romance *Eu sou um gato*, que alcançou o sucesso imediato e, ainda hoje, muito apreciado, o autor satiriza as vidas humanas transtornadas pela rápida e profunda transformação, devido ao processo de modernização do país. Em romances posteriores, como *E então* (1909) e *A alma* (1915), Soseki analisou com profundidade a psicologia do homem em conflito com a sociedade civilizada.

吾輩は猫である

夏目漱石

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたかとんと見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩はここで始めて人間というものを見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間中で一番野蛮な種族であったそうだ。この書生というのは時々我々を捕えて煮て食うという話である。しかしその当時は何という考もなかったから別段恐いとも思わなかった。ただ彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じがあったばかりである。掌の上で少し落ちついて書生の顔を見たのがいわゆる人間というものの見始であろう。この時妙なものだと思った感じが今でも残っている。第一毛をもって装飾されべきはずの顔がつるつるしてまるで薬缶だ。その後猫にもだいぶ逢ったがこんな片輪には一度も出会わした事がない。のみならず顔の真中があまりに突起している。そうしてその穴の中から時々ぷうぷうと煙を吹く。どうも咽せばくて実に弱った。これが人間の飲む煙草というものである事はようやくこの頃知った。

この書生の掌の裏でしばらくはよい心持に坐っておったが、しばらくすると非常な速力で運転し始めた。書生が動くのか自分だけが動くのか分らないが無暗に眼が廻る。胸が悪くなる。到底助からないと思っていると、どさりと音がして眼から火が出た。それまでは記憶しているがあとは何の事やらいくら考え出そうとしても分らない。

ふと気が付いて見ると書生はいない。たくさんおった兄弟が一足も見えぬ。肝心の母親さえ姿を隠してしまった。その上今までの所とは違って無暗に明るい。眼を明いていられぬくらいだ。はてな何でも容子がおかしいと、のそのそ這い出して見ると非常に痛い。吾輩は藁の上から急に笹原の中へ棄てられたのである。

ようやくの思いで笹原を這い出すと向うに大きな池がある。吾輩は池の前に坐ってどうしたらよからうと考えて見た。別にこれという分別も出ない。しばらくして泣いたら書生がまた迎に来てくれるかと考え付いた。ニャー、ニャーと試みにやって見たが誰も来ない。そのうち池の上をさらさらと風が渡って日が暮れかかる。腹が非常に減って来た。泣きたくても声が出ない。仕方がない何でもよいから食物のある所まであるこうと決心をしてそろりそろりと池を左りに廻り始めた。どうも非常に苦しい。そこを我慢して無理やりに這って行くとうまくの事で何となく人間臭い所へ出た。ここへ這入ったら、どうにかなると思って竹垣の崩れた穴から、とある邸内にもぐり込んだ。縁は不思議なもので、もしこの竹垣が破れていなかったなら、吾輩はついに路傍に餓死したかも知れんのである。一樹の蔭とはよく云ったものだ。この垣根の穴は今日に至

るまで吾輩が隣家の三毛を訪問する時の通路になっている。さて邸へは忍び込んだもののこれから先どうして善いか分らない。そのうちに暗くなる、腹は減る、寒さは寒し、雨が降って来るという始末でもう一刻の猶予が出来なくなった。仕方がないからとにかく明るくて暖かそうな方へ方へとあるいて行く。今から考えるとその時はすでに家の内に這入っておったのだ。ここで吾輩は彼の書生以外の人間を再び見るべき機会に遭遇したのである。第一に逢ったのがおさんである。これは前の書生より一層乱暴な方で吾輩を見るや否やいきなり頸筋をつかんで表へ抛り出した。いやこれは駄目だと思ったから眼をねぶって運を天に任せていた。しかしひもじいのと寒いのはどうしても我慢が出来ん。吾輩は再びおさんの隙を見て台所へ這い上った。すると間もなくまた投げ出された。吾輩は投げ出されては這い上り、這い上っては投げ出され、何でも同じ事を四五遍繰り返したのを記憶している。その時におさんと云う者はつくづくいやになった。この間おさんの三毛を偷んでこの返報をしてやってから、やっと胸の痞が下りた。吾輩が最後につまみ出されようとしたときに、この家の主人が騒々しい何だといいながら出て来た。下女は吾輩をぶら下げて主人の方へ向けてこの宿なしの小猫がいくら出しても出しても御台所へ上って来て困りますという。主人は鼻の下の黒い毛を撚りながら吾輩の顔をしばらく眺めておったが、やがてそんなら内へ置いてやれといったまま奥へ這入ってしまった。主人はあまり口を聞かぬ人と見えた。下女は口惜しそうに吾輩を台所へ抛り出した。かくして吾輩はついにこの家を自分の住家と極める事にしたのである。

吾輩の主人は滅多に吾輩と顔を合せる事がない。職業は教師だそうだ。学校から帰ると終日書齋に這入ったぎりほとんど出て来る事がない。家のものは大変な勉強家だと思っている。当人も勉強家であるかのごとく見せている。しかし実際はうちのものがいうような勤勉家ではない。吾輩は時々忍び足に彼の書齋を覗いて見るが、彼はよく昼寝をしている事がある。時々読みかけてある本の上に涎をたらしている。彼は胃弱で皮膚の色が淡黄色を帯びて弾力のない不活潑な徴候をあらわしている。その癖に大飯を食う。大飯を食った後でタカジャスターゼを飲む。飲んだ後で書物をひろげる。二三ページ読むと眠くなる。涎を本の上へ垂らす。これが彼の毎夜繰り返す日課である。吾輩は猫ながら時々考える事がある。教師というものは実に楽なものだ。人間と生れたら教師となるに限る。こんなに寝ていて勤まるものなら猫にでも出来ぬ事はないと。それでも主人に云わせると教師ほどつらいものはないそうで彼は友達が来る度に何とかかんとか不平を鳴らしている。

吾輩がこの家へ住み込んだ当時は、主人以外のものにははなはだ不人望であった。どこへ行っても跳ね付けられて相手にしてくれ手がなかった。いかに珍重されなかったかは、今日に至るまで名前さえつけてくれないのでも分る。吾輩は仕方がないから、出来得る限り吾輩を入れてくれた主人の傍に居る事をつとめた。朝主人が新聞を読むときは必ず彼の膝の上に乗る。彼が昼寝をするときは必ずその背中に乗る。これはあながち主人が好きという訳ではないが別に構い手がなかったからやむを得るのである。その後いろいろ経験の上、朝は飯櫃の上、夜は炬燵の上、天気の良い日は縁側へ寝る事とした。しかし一番心持の好いのは夜に入ってここのうちの小供の寝床へもぐり込んでいっしょに居る事である。この小供というのは五つと三つで夜になると二人が一つ床へ入って一間へ寝る。吾輩はいつでも彼等の中間に己れを容るべき余地を見出してどう

にか、こうにか割り込むのであるが、運悪く小供の一人が眼を醒ますが最後大変な事になる。小供は—ことに小さい方が質がわるい—猫が来た猫が来たといつて夜中でも何でも大きな声で泣き出すのである。すると例の神経胃弱性の主人は必ず眼をさまして次の部屋から飛び出してくる。現にせんだってなどは物指で尻ぺたをひどく叩かれた。

吾輩は人間と同居して彼等を観察すればするほど、彼等は我儘なものと断言せざるを得ないようになった。ことに吾輩が時々同衾する小供のごときに至っては言語同断である。自分の勝手な時は人を逆さにしたり、頭へ袋をかぶせたり、抛り出したり、へつついの中へ押し込んだりする。しかも吾輩の方で少しでも手出しをしようものなら家内総がかりで追い廻して迫害を加える。この間もちょっと畳で爪を磨いたら細君が非常に怒ってそれから容易に座敷へ入れない。台所の板の間で他が顫えていても一向平気なものである。吾輩の尊敬する筋向の白君などは逢う度毎に人間ほど不人情なものはないと言っておらる。白君は先日玉のような子猫を四足産まれたのである。ところがその家の書生が三日目にそいつを裏の池へ持って行って四足ながら棄てて来たそうだ。白君は涙を流してその一部始終を話した上、どうしても我等猫族が親子の愛を完くして美しい家族的生活をするには人間と戦ってこれを剿滅せねばならぬといわれた。一々もつもの議論と思う。また隣りの三毛君などは人間が所有権という事を解していないといって大に憤慨している。元来我々同族間では目刺の頭でも鰯の膾でも一番先に見付けたものがこれを食う権利があるものとなっている。もし相手がこの規約を守らなければ腕力に訴えて善いくらいのものだ。しかるに彼等人間は毫もこの観念がないと見えて我等が見付けた御馳走は必ず彼等のために掠奪せらるるのである。彼等はその強力を頼んで正当に吾人が食い得べきものを奪ってすましている。白君は軍人の家におり三毛君は代言の主人を持っている。吾輩は教師の家に住んでいるだけ、こんな事に関すると両君よりもむしろ楽天である。ただその日その日がどうにかこうにか送られればよい。いくら人間だって、そういつまでも栄える事もあるまい。まあ気を永く猫の時節を待つがよからう。

我儘で思い出したからちょっと吾輩の家の主人がこの我儘で失敗した話をしよう。元来この主人は何といつて人に勝れて出来る事もないが、何にでもよく手を出したがる。俳句をやつてほととぎすへ投書をしたり、新体詩を明星へ出したり、間違ひだらけの英文をかいいたり、時によると弓に凝ったり、謡を習ったり、またあるときはヴァイオリンなどをブービー鳴らしたりするが、気の毒な事には、どれもこれも物になっておらん。その癖やり出すと胃弱の癖にいやに熱心だ。後架の中で謡をうたつて、近所で後架先生と渾名をつけられているにも関せず一向平気なもので、やはりこれは平の宗盛にて候を繰返している。みんながそら宗盛だと吹き出すくらいである。この主人がどういう考になったものか吾輩の住み込んでから一月ばかり後のある月の月給日に、大きな包みを提げてあわただしく帰って来た。何を買って来たのかと思うと水彩絵具と毛筆とワットマンという紙で今日から謡や俳句をやめて絵をかく決心と見えた。果して翌日から当分の間というものは毎日毎日書斎で昼寝もしないで絵ばかりかいている。しかしそのかき上げたものを見ると何をかいたものやら誰にも鑑定がつかない。当人もあまり甘くないと思ったものか、ある日その友人で美学とかをやっている人が来た時に下のような話をしているのを聞いた。

「どうも甘くかけないものだね。人を見ると何でもないようだが自ら筆をとって見ると今更のようにむずかしく感ずる」これは主人の述懐である。なるほど詐りのない処だ。彼の友は金縁の眼鏡越しに主人の顔を見ながら、「そう初めから上手にはかけないさ、第一室内の想像ばかりで画がかける訳のものではない。昔し以太利の大家アンドレア・デル・サルトが言った事がある。画をかくなら何でも自然その物を写せ。天に星辰あり。地に露華あり。飛ぶに禽あり。走るに獣あり。池に金魚あり。枯木に寒鴉あり。自然はこれ一幅の大活画なりと。どうだ君も画らしい画をかこうと思うならちと写生をしたら」

「へえアンドレア・デル・サルトがそんな事をいった事があるかい。ちっとも知らなかった。なるほどこりゃもっともだ。実にその通りだ」と主人は無暗に感心している。金縁の裏には嘲けるような笑が見えた。

その翌日吾輩は例のごとく椽側に出て心持善く昼寝をしていたら、主人が例になく書斎から出て来て吾輩の後ろで何かしきりにやっている。ふと眼が覚めて何をしているかと一分ばかり細目に眼をあけて見ると、彼は余念もなくアンドレア・デル・サルトを極め込んでいる。吾輩はこの有様を見て覚え失笑するのを禁じ得なかった。彼は彼の友に擲擲せられた結果としてまず手始めに吾輩を写生しつつあるのである。吾輩はすでに十分寝た。欠伸がしたくてたまらない。しかしせつかく主人が熱心に筆を執っているのを動いては気の毒だと思つて、じつと辛棒しておつた。彼は今吾輩の輪廓をかき上げて顔のあたりを色彩っている。吾輩は自白する。吾輩は猫として決して上乘の出来ではない。背といい毛並といい顔の造作といいあえて他の猫に勝るとは決して思つておらん。しかしいくら不器量の吾輩でも、今吾輩の主人に描き出されつつあるような妙な姿とは、どうしても思われぬ。第一色が違う。吾輩は波斯産の猫のごとく黄を含める淡灰色に漆のごとき斑入りの皮膚を有している。これだけは誰が見ても疑うべからざる事実と思う。しかるに今主人の彩色を見ると、黄でもなければ黒でもない、灰色でもなければ褐色でもない、さればとてこれらを交ぜた色でもない。ただ一種の色であるというよりほかに評し方のない色である。その上不思議な事は眼がない。もつともこれは寝ているところを写生したのだから無理もないが眼らしい所さえ見えないから盲猫だか寝ている猫だか判然しないのである。吾輩は心中ひそかにいくらアンドレア・デル・サルトでもこれではしようがないと思つた。しかしその熱心には感服せざるを得ない。なるべくな動かずにあってやりたいと思つたが、さっきから小便が催うしている。身内の筋肉はむずむずする。最早一分も猶予が出来ぬ仕儀となったから、やむをえず失敬して両足を前へ存分のして、首を低く押し出してあ—あと大なる欠伸をした。さてこうなつて見ると、もうおとなしくしていても仕方がない。どうせ主人の予定は打ち壊したのだから、ついでに裏へ行って用を足そうと思つてのそのそ這い出した。すると主人は失望と怒りを掻き交ぜたような声をして、座敷の中から「この馬鹿野郎」と怒鳴った。この主人は人を罵るときは必ず馬鹿野郎というのが癖である。ほかに悪口の言いようを知らないのだから仕方がないが、今まで辛棒した人の気も知らないで、無暗に馬鹿野郎呼わりは失敬だと思ふ。それも平生吾輩が彼の背中へ乗る時に少しは好い顔でもするならこの漫罵も甘んじて受けるが、こっちの便利になる事は何一つ快くしてくれた事もないのに、小便に立ったのを馬鹿野郎とは酷い。元来人間というものは自

己の力量に慢じてみんな増長している。少し人間より強いものが出て来て窘めてやらなくてはこの先どこまで増長するか分らない。

EU SOU OU GATO (Trecho inicial do capítulo I)

Soseki Natsume

Tradução: Ernei Ribeiro*

Eu sou um gato. Ainda não tenho nome.

Não tenho a mínima idéia de onde eu nasci. Recordo apenas de estar miando num local sombrio e úmido. Foi ali que eu vi pela primeira vez um ser humano. Soube mais tarde que esse era, na verdade, o mais feroz tipo humano: o estudante². Ouvi dizer que esses estudantes, às vezes, nos pegam, cozinham e comem. Entretanto, naquela ocasião, eu não sabia nada disso e, desse modo, não o achava nem um pouco assustador. Apenas experimentava uma sensação de estar flutuando quando ele me colocou na palma da mão e me levantou. Acomodado sobre a palma da sua mão, olhei o rosto do estudante; foi a primeira vez que vi um ser humano. A estranheza que senti nessa ocasião permanece em mim ainda hoje. Em primeiro lugar, o rosto que devia estar ornamentado de pêlo era liso como uma chaleira. Mais tarde encontrei muitos gatos, mas não me deparei nenhuma vez com uma deformidade destas. Além disso, a parte central do rosto era muito protuberante. Uma fumaça sufocante saía, de vez em quando, dos buracos que havia no meio dessa protuberância, o que achei insuportável. Recentemente soube que se tratava de cigarro fumado pelos seres humanos.

Fiquei sentado comodamente na palma da mão do estudante, mas logo tudo começou a se locomover com uma velocidade alucinante. Não sabia se era eu ou o estudante que estava em movimento e senti uma tontura insuportável. Tive náuseas. Comecei a achar que não havia mais salvação, quando ouvi um baque e faíscas saíram dos meus olhos. Minhas recordações param por aí, e não consigo me lembrar do que ocorreu depois, por mais que eu me esforce.

Então, dei-me conta de que o estudante não estava mais. Também não vi sequer um dos meus numerosos irmãos. Até mesmo a minha mãe, que era a mais importante, havia sumido. Além disso, eu estava num local muito mais luminoso do que antes. Não podia nem abrir os olhos. Achei o local estranho e resolvi andar, engatinhando, mas senti, então, muitas dores. Eu fora tirado de cima das palhas macias e jogado, de repente, em cima de uma moita de bambu-anão.

Depois de sair dali com dificuldade, avistei um lago mais adiante. Fiquei sentado na frente do lago e pensei no que poderia fazer. Não obtive nenhuma idéia em especial. Pensei que o estudante viria me buscar novamente caso eu

* Aluno do curso de Bacharelado – Japonês/Português

¹ No original, *shosei*. Estudante proveniente do interior, que morava na casa de um professor (ou um erudito) e prestava os serviços em troca de moradia e refeições.

miasse um pouco. Tentei um “miau, miau”, mas ninguém apareceu. Enquanto isso, o vento deslizava sobre a superfície do lago e o dia escurecia. Estava com muita fome. Mesmo querendo chorar a minha voz não saía mais. Já que não havia outra solução, decidi caminhar até um local onde houvesse comida e comecei a circundar o lago com cautela pelo lado esquerdo. Sentia-me muito mal. Suportando o sofrimento, fui engatinhando com muito esforço até um local que tinha uma atmosfera humana. Achei que poderia ser salvo se entrasse ali e penetrei naquela propriedade através de um buraco aberto na cerca de bambu. Era um incrível lance do destino, pois, caso a cerca não tivesse quebrado ali, eu teria morrido de fome na beira da estrada. Tem razão o ditado: “Sob a sombra da mesma árvore”.² O buraco nessa cerca, ainda hoje, é a passagem que utilizo para visitar a gatinha malhada Mike, minha vizinha. Bem, consegui entrar furtivamente na residência, mas não sabia o que fazer. Enquanto isso, escurecia, a fome crescia, o frio aumentava e, ainda por cima, começava a chover; eu não podia continuar assim nem mais um instante. Não havendo outro jeito, fui caminhando em busca de um local iluminado e que parecia mais quente. Pensando agora, já me encontrava dentro da casa. Foi então que tive oportunidade de ver os humanos além daquele estudante. O primeiro que deparei foi a empregada Osan. Era muito mais violenta do que aquele estudante, e, assim que me viu, me agarrou pela nuca e me jogou para fora. Pensei que ia morrer. Fechei os olhos confiando o meu destino à Providência. Porém, de maneira alguma, podia agüentar a fome e o frio. Aproveitando o descuido de Osan, engatinhei para dentro da cozinha. Mas, logo fui arremessado de novo. Lembro-me de ser arremessado e retornar, retornar e ser arremessado, repetindo isso umas quatro ou cinco vezes. Naquela ocasião, achei Osan uma criatura repugnante. Há poucos dias, finalmente, senti-me aliviado por ter conseguido vingar-me dela roubando seu peixe, uma cavala. No momento em que eu estava sendo expulso, pela última vez, o dono da casa apareceu e perguntou: “Que barulho é esse?”. A empregada me mostrou ao patrão, segurando-me dependurado em sua direção, disse: “Este gatinho de rua teima em entrar na cozinha, por mais que eu tente expulsá-lo.” Enquanto contorcia os pêlos negros abaixo do nariz, o patrão contemplou o meu rosto, por um tempo, e disse: “Nesse caso, deixe-o ficar”, e se retirou para dentro. Parecia ser um homem de poucas palavras. A empregada, parecendo vexada, me arremessou para o interior da cozinha. Desta maneira, eu decidi, por fim, fazer desta casa o meu lar.

Eu raramente me encontrava com o meu dono. Parece que ele exerce a profissão de professor. Depois que retorna da escola, ele se encerra no seu escritório, durante o resto do dia, e quase não sai de lá. O pessoal da casa imagina que é um

² Refere-se ao ditado budista: “Descansamos juntos sob a sombra da mesma de árvore, devido às premissas das nossas vidas passadas” – Relação do *karma* das vidas passadas com a vida presente.

grande estudioso. Ele próprio exhibe ares de estudioso. Entretanto, ele não é o modelo de diligência ao qual o pessoal da casa costuma se referir. De vez em quando, eu entro com passos sorrateiros no seu escritório para dar uma espiada, e ele costuma estar seesteando. Às vezes, está babando sobre o livro que tinha começado a ler. Ele sofre de problemas digestivos e sua pele tem uma coloração amarelada e sem elasticidade, revelando os sinais de ausência de vitalidade. Mesmo assim, ele é um glutão. Depois de comer uma quantidade absurda, toma Taka-díastase³. Depois de comer, abre um livro. Após ler duas ou três páginas, fica sonolento e acaba babando sobre o livro. Estas são as atividades que ele repete todas as noites. Apesar de não passar de um gato, às vezes eu reflito que o trabalho de professor é realmente folgado. Quem nascer ser humano, devia se tornar professor. Até um gato conseguiria exercer uma profissão em que se dorme tanto. Apesar disso, segundo o meu patrão não há uma profissão mais árdua do que essa. Quando os amigos vêm visitá-lo, ele se queixa contando isto ou aquilo sobre sua profissão.

Quando ingressei nesta casa, eu era bastante impopular, menos para meu dono. Era rejeitado em todos os locais e ninguém queria se tornar meu amigo. Pode-se entender o quanto não fui estimado, pelo fato de, até hoje, não ter recebido um nome. Como não havia outra alternativa, eu tentava, na medida do possível, ficar perto do patrão que me acolheu. Quando ele lê o jornal pela manhã, eu sempre subo no seu colo. Quando ele seesteia, eu sempre subo nas suas costas. Não quer dizer, com isso, que eu gostasse do meu dono, mas era preciso fazê-lo, já que não havia outro que se interessasse por mim. Depois de muitas experiências que se seguiram, passei a dormir, de manhã, sobre a vasilha de arroz cozido; à noite sobre o *kotatsu*⁴, e na varanda, quando fazia bom tempo. Porém, o mais agradável era, quando, durante à noite, me metia no leito das crianças e dormia junto com elas. As crianças tinham cinco e três anos de idade e, à noite, as duas dormiam no mesmo leito. Eu sempre procurava me introduzir entre elas para encontrar um bom local. Mas, se, infelizmente, uma das crianças se acordasse, a situação ficava feia. A criança (a menor tinha um temperamento especialmente mau) se pôe a chorar e gritar, não se importando se era meio da noite ou não: “O gato está aqui! O gato está aqui!”. Então, o patrão, que sofre de problemas nervosos e digestivos, se acorda e vem correndo do quarto contíguo. No outro dia, de fato, bateram, sem pena, no meu traseiro com uma régua.

Desde que passei a conviver com os seres humanos e observá-los, tenho que afirmar que eles agem de acordo com seus caprichos, especialmente, aquelas crianças com quem eu durmo de vez em quando. Essas crianças me pegam e

³ Marca de remédio para a digestão comercializado na época.

⁴ Espécie de aquecedor acoplado numa mesa para as pessoas se sentarem em volta.

viram de cabeça para baixo, colocam um saco sobre a minha cabeça ou me empurram para dentro do forno. Entretanto, se eu agisse de acordo com a minha vontade, todos da casa me perseguiriam e me castigariam. Um dia desses, a patroa ficou furiosa porque eu estava afiando as unhas no tatame da sala e, desde então, meu acesso para o local ficou quase impossível. Por outro lado, as pessoas se mostram indiferentes quando me vêem tremendo de frio na cozinha com assoalho de madeira. A venerada senhora gata Branca, que mora no outro lado da rua, costuma dizer, toda a vez que ela me encontra, que não há nada mais cruel do que os seres humanos. A senhora Branca teve recentemente quatro lindos filhinhos. Porém, três dias depois, o estudante dessa casa levou os gatinhos para um lago situado aos fundos e os jogou lá. A senhora Branca contou-me toda essa história, derramando lágrimas, e disse que, para que nós possamos concretizar o amor entre pais e filhos e construirmos uma bela vida familiar, era necessário lutarmos com os seres humanos e exterminá-los. Achei seu argumento perfeitamente razoável. Por sua vez, a senhorita Mike, minha vizinha, me disse, muito irada, que os seres humanos não entendem o direito de propriedade. Entre nós gatos, aquele que encontra primeiro, seja a cabeça de um peixe seco ou o umbigo de uma tainha, tem o direito de comê-lo. Caso o outro gato não respeite esse regulamento, a questão pode ser resolvida através da força braçal. No entanto, os seres humanos não parecem entender desse conceito e sempre saqueiam o alimento encontrado por nós. Aproveitam da superioridade de suas forças, eles arrebatam o alimento que legitimamente nos pertence e fazem de conta que nada aconteceu. A senhora Branca mora na casa de um militar e o dono da Mike é um advogado. Como eu vivo na casa de um professor, sou mais despreocupado que elas em relação a esses assuntos. Eu penso, apenas, de que maneira poderia passar os meus dias. Mesmo os seres humanos não irão prosperar para sempre. É melhor esperar sem pressa a era dos gatos.

Contarei agora uma história que lembrei, por ter falado no egoísmo, na qual meu dono teve um insucesso devido ao seu egoísmo. O meu dono não possui especial habilidade em nada, mas tenta se intrometer em todas as áreas possíveis. Enviava haikai para o periódico Hototogisu e poemas modernistas para o periódico Myojo; escrevia textos em inglês cheios de erros, ou se entusiasmava com exercícios de arco e flecha; recitava o canto do teatro Nô e, também, tocava violino, produzindo sons desafinados; mas nada disso tinha algum resultado, a ponto de causar dor. Apesar disso, uma vez começado, ele se dedicava com muito fervor, embora sofresse de mal estomacal. A vizinhança conferiu-lhe o apelido de Professor Banheiro por estar recitando cantos de Nô no banheiro, mas ele não se importava e continuava recitando: "Aqui está Taira no Munemori..." O pessoal da vizinhança não conseguia conter o riso e dizia: "Ouçam, Munemori de novo!". Eu não conseguia imaginar o que se passava na cabeça do meu dono, quando, numa segunda-feira, no dia de receber seu salário, cerca de um mês depois de eu ter passado a viver nesta casa, ele voltou apressado carregando um grande embru-

lho. Havia comprado caixa de aquarela, pincel e papel Whatman. Parecia estar decidido a parar com o haikai e o canto e começar a pintura de quadros. De fato, a partir do dia seguinte, não sesteou mais, e, diariamente, passou a pintar gravuras em seu escritório. Porém, ninguém conseguia interpretar o que teria pintado. Ele próprio deve ter achado que não foram trabalhos bem feitos, pois, certo dia, quando um amigo especialista em Teoria Estética veio visitá-lo, eu ouvi a seguinte conversa:

– Não é nada fácil pintar bem. Parece fácil quando vejo o trabalho de alguém, mas quando pego o pincel, noto que não é nada fácil. ? Era o parecer do meu dono, que era, realmente, um depoimento honesto. O amigo disse, olhando o rosto do meu dono através dos óculos de armação dourada:

– Não é possível pintar com tanta facilidade já no começo. Em primeiro lugar, pinturas não podem ser criadas apenas com a imaginação, encerrado dentro de um quarto. Quem disse isso foi o antigo e grande mestre italiano Andrea del Sarto. Disse que deve fazer questão de retratar a natureza no momento de estar pintando. No céu, há estrelas; na terra, orvalho brilha; há os pássaros a voar e os animais a correr. Há no lago peixinhos dourados, e corvos inverniais sobre as árvores desfolhadas. A natureza é um grande retrato vívido. Que tal? Se pretende criar um quadro de algum valor, por que não tentar a natureza como ela é?

– Como? Andrea del Sarto disse isso? Não sabia. Ele, de fato, tem razão. É isso, precisamente ? disse meu dono com demasiada admiração. Notei um sorriso zombeteiro atrás da armação dourada dos óculos.

No dia seguinte, eu estava sesteando tranqüilo na varanda como de costume. Então, o meu dono saiu do escritório e ficou fazendo algo atrás de mim, de modo inusitado e com concentração. Acordei-me e abri um pouco os olhos para saber o que ele estava fazendo. Avistei-o compenetrado, querendo se tornar Andrea del Sarto. Não pude conter o riso ao ver a cena. Como resultado de ter sido troçado pelo amigo, ele estava tentando me retratar. Quanto a mim, já dormira o suficiente e não conseguia controlar a vontade de bocejar, porém, sentindo pena de meu dono que pintava com fervor, mantive-me imóvel. Ele tinha acabado de traçar os meus contornos e agora corria o meu rosto. Tenho que confessar que nunca fui um gato muito elegante. Nunca pensei que a minha altura, pelagem ou fisionomia fosse melhor que a dos outros gatos. Mas por mais feio que eu fosse, discordo totalmente do estranho semblante que o meu dono estava pintando. Em primeiro lugar, a cor estava errada. De maneira semelhante a um gato persa, minha pele é uma mistura de cinza claro com o tom amarelo, com as pintas como a de laca. Este é um fato inegável, no entanto, a coloração da pele do gato que meu dono pintava não era nem amarela e nem preta, nem cinza e nem castanha; tampouco era uma mistura dessas cores. Só posso afirmar que era um tipo de coloração. Além disso, estranhamente, na pintura não havia olhos. Está certo que me retratou enquanto eu dormia, mas não havia nem os traços que se aparentassem ser os olhos, logo, não ficou claro se era um gato cego ou um gato adorme-

cido. Pensei, no meu íntimo, que Andrea del Sarto era impossível nesse caso. Entretanto, tinha que admirar o seu fervor. Eu queria permanecer imóvel na medida do possível, mas sentia vontade de urinar. Os músculos do meu corpo se remexiam. Não podia prorrogar nem mais um minuto, e, inevitavelmente, cometi a descortesia de estender minhas patas dianteiras, abaixar a cabeça e dar um enorme bocejo. Nessas condições, não adiantava mais continuar quieto. Como o plano do meu dono havia sido frustrado, aproveitei a ocasião e fui andando em direção aos fundos para urinar. De dentro da sala, ele gritou: "Seu idiota!", numa voz que misturava decepção e ira. Costuma xingar os outros chamando de idiota. Compreendo que não conhece outra maneira de maldizer, mas acho falta de educação chamar outros de idiota, desconsiderando que eu tinha suportado até aquele momento. Mesmo assim, eu poderia tolerar alguns insultos caso ele fizesse uma cara simpática quando eu ficava sobre as suas costas; mas ele não fazia nada de especialmente bom para mim, e só porque me levantei para urinar, me chamou de idiota; era demais. Os seres humanos tendem a ser prepotentes, sobre-valorizando suas capacidades. Enquanto não aparecer alguém um pouco mais forte que os seres humanos para maltratá-los, essa prepotência não há de se acabar.

(Título original: Wagahai wa neko de aru; 1905)

どんぐりと山猫

作 宮沢賢治

おかしなはがきが、ある土曜日の夕がた、一郎のうちにきました。

かねた一郎さま 九月十九日

あなたは、ごきげんよろしいほど、けっこです。

あした、めんどなさいばんしますから、おいで

んなさい。とびどぐもたないでください。

山ねこ 拝

こんなのです。字はまるでへたで、墨もがさがさして指につくくらいでした。けれども一郎はうれしくてうれしくてたまりませんでした。はがきをそっと学校のかばんにしまって、うちじゅうとんだりはねたりしました。

ね床にもぐってから、山猫のにやあとした顔や、そのめんどうだという裁判のけしきなどを考えて、おそくまでねむりませんでした。

けれども、一郎が眼をさましたときは、もうすっかり明るくなっていました。おもてにでてみると、まわりの山は、みんなたったいまできたばかりのようにうるうるもりあがって、まっ青なそらのしたにならんでいました。一郎はいそいごはんをたべて、ひとり谷川に沿ったこみちを、かみの方へのぼって行きました。

すきとおった風がざあっと吹くと、栗の木はばらばらと実をおとしました。一郎は栗の木をみあげて、

「栗の木、栗の木、やまねこがここを通らなかったかい。」とききました。栗の木はちょっとしずかになって、

「やまねこなら、けさはやく、馬車でひがしの方へ飛んで行きましたよ。」と答えました。

「東ならぼくのいく方だねえ、おかしいな、とにかくもっといってみよう。栗の木ありがとう。」

栗の木はだまってまた実をばらばらとおとしました。

一郎がすこし行きますと、そこはもう笛ふきの滝でした。笛ふきの滝という